

丹生(株)を追え

～ 中央構造線に丹生を追う。～

今回の「野を行く」の始まりは、科教協の高知大会が終わった8月4日である。「朱(丹生)を追え」は地下茎43号の(3)でストップしている。その最後には、こう宣言している。「…そこから、また話がおもしろい方向に発展していくのやった。ここまでくると、もう、地下茎舎あげての総力戦です。」と。勇ましいことを言ったわりにはその後のことが報告されていないのですが、いろんなかたちで発展して行ったことは確かなんです。例会の報告等でも報告していないようなことは、いずれ必ずまとめたいとおもいます。今回は、四国へ我々が行った機会に「中央構造線」に焦点をあてながらいかに丹生を追ったかを報告しておきます。

ただし、いっぱい寄り道しました。その寄り道で、またちがった成果もありました。それも一緒に報告しておきます。

『水銀利用の歴史にちなんで』を

科教協の総会場で、奈良の中谷隆夫さんに出会いました。さっそく、前の『水銀ものがたり』の続編を書かれたと聞いていたので尋ねてみました。すると、中谷さんはそれを持っておられました。そして、それをおいただきました。まえの『水銀ものがたり』も力作ですが、今度は歴史も含めてのものでとてもおもしろいです。『水銀の利用の歴史にちなんで』(帝塚山「学園春秋」第29号抜刷昭和62年5月25日発行)となっている。内容は次のようになっている。

第1話 宇陀の伝説

- (1) 奈良盆地と宇陀 (2) なぜ宇賀志(ウカシ)をせめたのか?
- (3) ウカシ征服の伝説 (4) 丹生(にゅう)川上神社
- (5) 丹生神社の変化 (6) イワレ彦の丹生川での祈り
- (7) 私の宇陀地方の硫化水銀さがしの旅

第2話 仙人による薬の話

- (1) 仙人になろうとした王様たちの話
- (2) 仙人になる話 (3) 弘法大師の伝説

第3話 伊勢の丹生千軒のあと

特に第2話「仙人による薬の話」、第4話「古代技術に挑戦」というのがおもしろい。実際に水銀と硫黄から硫化水銀（朱）を作ることに挑戦しておられる。これは、ボクたちも挑戦したことがある。出来ないのである。あの真赤な朱は。黒くなってしまうのである。このことを『古代技術の復権～技術から見た古代人の生活と知恵～』（森 浩一对談集、小学館）に行きつくところで、「温配勾配」に原因があるのでは、と今のところ結論づけておられる。そして、どうして、こうもすごい技術を古代人が持っていたのか感動されている。まったくもって同感である。ここで、もう一つびっくりしたのは、『古代技術の復権』という本をきっちりと読んでおられるということである。この本は、職員室でとなりに座っていた教師が、丹生のことをひつこく話をしていたら「こんな本があるよ」と紹介してくれた本である。同じ所にいきついておられるようでうれしかった。とにかく、同じようなことに興味を持ち、こだわり続けておられる先行者がおられるというのは、うれしいことである。勇気づけられることでもある。

A. Tを追って、されど

ボク達の旅はいつも欲張りである。『中央構造線に丹生を追う』これがもちろん今回の主たるテーマである。しかし、こんな事も少し考えていた。「せっかく四国まできとるんや。我々のところよりもより九州に近いここで、あのA. T（始良火山灰）をみつきたい。」もちろんこれとて、無手勝流なんの手がかりがあるわけではなかった。ところが、その手がかりができたのである。全体会の終わった会場でボクは聞きまくった。「この近くにA. Tは…」と。そうするうちに、この事を教えてくれる人が現われた。愛媛の芳我さんである。芳我さんはフィールドワークの案内役で急いでおられた。でもこう言うてくれたった。「それなら、みつかったところがある。今から、その方を通していくから…」と。中谷さんの運転で我々は必死で、後を追った。「このあたりで…」と教えてもらったところでは、我々は残念ながらみつけることはできなかった。芳我さんは、こうも言われた。「松山では、運動公園でも…」と。「愛媛大の鹿島愛彦さんがくわしいので…」とも言われた。宿を何処でとるか迷っていた我々は、松山に向かうことに決めた。四国は山又山である。切出しの崖を見るたびに、「おっ、ひよっとして…」という思いで、車を停めて、崖を登るが、みつけることは出来ない。「そう簡単にみつけることが出来ては、ありがたみがないがな」と、自分達をなぐさめながら。松山まで。松山に入るまでに、『砥部衝上断層』を見に行く。「おおっ。これぞ中央構造線か。」というのを期待していくが、その感激はなかった。「これか？断層線は」という程度のものであった。暗くなりかけて、運動公園も行くが、これ

もやっぱり空振りである。「野を行く」初日の道後温泉での夜、我々は暗かった。

湯の谷温泉、別子銅山へ

空振りの初日から、一夜明けた5日。我々は中永さんを送らねばならなかった。中永さんはここから萩への職員旅行へ合流するのであった。この後の旅がどう発展するのかがわかっていたら、強く引き止めるのであったが、この段階ではわからなかったのである。松山港へ、中永さんを送って行った。

ここからは、中谷さん、楠田の二人の「野を行く」である。まずは、中央構造線に沿って東へ車を走らせる。どれぐらい走ったであろうか。もう昼近くになっていた。国道11号線である。小松を過ぎて、西条市に入っている。道路右手（つまり南、石鎚山側）に見えたのである。「湯の谷温泉」の文字と、によきつつ立った煙突が。

二人一緒に『おっ、あれや!!』。この温泉は、始めの計画から入っていた。しかし、前日の様子から考えると、どうもすんなりとみつけられそうになかった。前もって見てきた『中央構造線900kmの旅』（NHK）では、「中央構造線から湧き出す湯」として紹介されていたところである。「まずは、この湯につかろう。」と立ち寄る。ここが湧き口であるというところを見て、内にはいる。昼間であるが、何人かの老人の方が入っておられる。その風景たるや、実にのんびりとしたものである。湯から上がって、食堂にいて、昼食をとる。ここがおじいちゃんやおばあちゃんの憩いの場となっているのだろう。カラオケがおいてある。食堂のおばちゃんに、この温泉のことや、西条市役所への道を聞いていると、さっきまでカラオケをやっておられたおじさんが、話かけてくれた。このおじさんが、この温泉にいやに詳しい。「どのテレビをみてこられたか」とまで聞いてのやった。どうも、このところなんかいもテレビ等で紹介されているらしい。ついには、このおじさん、この温泉について書かれた文献のコピーまで見せてくれたのやった。どうやら、ここの主人のようである。ひょっとしたら、「丹生」のことも知っておられることがあるのではと、聞いてみるが、手掛りをえることは出来なかった。しかし、市の川鉾山のこと、そこで取れた「アンチモーニ」（アンチモンのことであろう。おじさんはこう言われたように聞こえた。）のこと、別子温泉とこの温泉のちがいがい。等など詳しく教えてくれたのやった。

市役所に次に行ってみることにした。しかし、ここでは、湯之谷温泉等について、それ以上の詳しいことを知ることはできなかった。次に隣にある図書館へいった。ここでは、「西条市史」に、湯之谷温泉のおじさんがもっておられた文とおなじものをみつけて、コピーをしてもらった。

このとき、『鉾山史』のような本に、こんなことが書かれてあるのを見

つけたのである。「続日本紀によれば、698年、伊予の国より白め（輝安鉱、アンチモン 市の川産）と、朱砂（宇摩郡東部つまり今の愛媛県北宇摩郡日吉村産）が献上された。」という。ここにきて、はじめて、丹生に関する情報をてにいれることができたのである。このあと、図書館の横にある博物館へも行ったのである。ここは例の市の川鉱山の「世界一大きな輝安鉱」が置いてあるところとして、有名であるらしい。その現物には、お目にかかれなかったが、写真のみ見せてもらった。中でいろんな興味ある話を館長さんにお聞きすることができた。まず例の『中央構造線…』の取材でNHKもここにきたそうだ。放送されなかったようであるが。またここ数年、京大のグループが中央構造線の調査ということで、この西条市を訪れているようである。その時の発見だとおっしゃって『抱き石』なるものが展示してある。丸い大きな石のなかにまた小さな丸い石が入っている。これが、どうして「断層運動」を物語るものなのかよくわからぬ。興味あることとしては、ここにあの水銀蒸溜に用いたかという「~~蒸~~」（はそう）がたくさん展示してあったということである。ただし、ここでの展示の説明では、「祭事用」ということになっていた。このことを館長さんにおたずねすると、「よくわかっていないが…、朱から水銀をとりだすのに用いたということは聞いたことがない」ということだった。それから、館長さんはとても親切に、閉山している市の谷鉱山の資料を捜して下さった。資料をまとめたものが出ているようである。残念ながら、今回はそれを手にいれることができなかった。それにしても、館長さんには、訳のわからぬことを言って迷い込んだ我々に、ていねいにつつきあってもらって、うれしかったです。

時間がない。西条市を後にして、別子銅山に向かった。

「中央構造線と鉱山」興味あるテーマではあるが、ここではあくまで「水銀」にしよう。松田さんによれば、ここ別子銅山でも、水銀を含む鉱石が、戦後発見されている。

閉館間際の「別子銅山記念館」すべりこむ。館内があまりにきれいである。何か、この銅山がたどったであろう「労働の歴史」と、ふつりあいに感じるのは、どうしてだろう。ゆっくりと見れないのが残念であった。

かつての「栄華」の後を見ようと、車は山奥まで入る。工事中と言うこともあって行き止まりである。仕方無い。新居浜まで引き返す。

再び国道11号線を走る。しばらく行くと、松山自動車道が開通しているところがある。山又山の四国には高速道路がない。ところがこの松山自動車道、まさに中央構造線の真上を走らせようというのである。これは話の種にと、この開通しているところだけ乗ってみる。「なるほど、これが中央構造線か」とよくわかる。川之江に着く、ここで宿をとる。

（つづく）

＊ このあと、『ついに発見！池田でA、Tを』『本場（？）の藍畑へ』『ついに見たぞ！朱の製造遺跡』と続きます。乞うご期待！！